葬送儀礼習俗成立の比較学的考察

和田謙寿

一

人類の歴史と葬送の歴史とは必ずしも一致するものではないが、長い間かかって相互的関係を有してきたことは確かなことである。そこで私の気にかかることは、仏教伝来以前のわが国の葬送習俗である。私自身、葬送の儀礼に立会う時、果して、今ここに行っているところの仏的儀礼が、如何なる立場のもとに、どのような意義をもって行われているものなのか、深く考えざるを得ない場合がある。わが国に仏教が伝来して以来、未だ一千五百年の歴史しか持たない現在、それとても、日本の隅々までも深く滲透しているとはどうしても考えられないところである。このことは日本以外の仏教的諸外国にも言い得るところである。それだけに、一口に仏葬と言ったところで、その類型は夥しい数に上ることであろう。日本の南端、奄美諸島[1]では現在でも仏教的な文化とはほど遠い形態によって民俗的信仰が規制されている。日本国内における中世末期以降、とくに近世初頭における仏教と集落（家）との寺檀制度という有機的関係機能は、当地においては一切見られず、ノロからユタの死者儀礼、仏オロシ（ホトケ）や家事祈禱の信仰によって結びつがれている。これらの形態は、かつて仏教文化の滲透しなかった時代、つまり、日本における仏教伝来以前の基層文化の実相を探る唯一なる足がかりとなり得たことであろう。現在の日本において葬式と言えば、誰れもが先ず仏教の影響を思い出す。しかし実際に個々の点に当って観察するとき、必ずしも仏教的なものだけとは考えられない。そこにはわが国古来よりの伝承によるもの、つまり、民間信仰的なものが多分に存していることが察せられる。しかし更に分析解明してみると、中国大陸をはじめとして、その近隣諸国の影響を受けていると考えられるものも数多く存在するのである。もちろん、古来よりの民間信仰の成因要素として中国大陸の文化の影響を指摘することは当然すぎる事実ではあるが、葬送習俗をつぶさに繙（ヒモド）くとき、あまりにも、中国

大陸民衆との習俗が類似的であることに驚かされるからである。同じ葬事に係ることゆえ、たとえ人種は異なるとも、感情的には多くの類似行為の行われるのは当然である。にもかかわらず、葬送の儀式を通してその内容しぐさを観察する時、完全にまでと思われる重複的な習俗事実、今後、この思想的、歴史的背景を究明することは大切なことであると思う。但し、葬送習俗儀礼の考え方の中において、その趣を異にすると思われる事項も見聞するが、この主要なる原因は風土性の相違によるものであろう。ここに、日本を中心としたところの葬送習俗の事物をかかげ、中国を始めとした近隣諸国との比較についてを考察してみることにしたい。

二

喜怒哀楽を受けたところの人たちの表現とは一体どのようなものであろうか。もちろん、その反応は人によりまちまちである。十人十色、百人百色と言うのが本当の答えであろう。しかし、喜怒哀楽と言う言葉は、ある意味では類型的な立場をも所持し、同じ立場の表現としてまとめることも出来る。冠婚葬祭も或る意味では前者と同様に考えることが出来得る言葉である。このような行事や習俗を行う場合には、必ず共通した一面を持つことがあり得るであろう。葬式は近親者より離別せねばならない悲しい行事でもあれば、死霊と接しねばならぬ恐怖の行事でもある。それゆえ、世界各地において、それに即した種々なる共通的な行事が行われる場合が多い。われわれは、ふとすると、かかる文化遺産の伝播現象のみに気を奪われ、その共通地盤についてを見失う場合が多い。同様な事は日本においても言い得る。そこには文化現象の捕え方如何によっても、立場は異なるかも知れぬが、ここでは実証的な立場のもとに追求してみることにしよう。

時代性の如何は別として、葬送行事の中に、死霊の恐怖と、肉親への離別の追慕観のあったことは確かなことである。この両者の感情は一見、相反したものの如く感じられるけれども、実はそうではなく、ただ表裏したものと考えられ、一般葬送習俗を構成したのである。一般に死霊の恐怖が文化発達の度合に従って肉親への離別の哀愁へ推移すると考えられる場合も多いが、更に葬送習俗面のみでなく、その範囲を拡大して考えた場合、共存社会の問題より風土性の問題へと発展するに至って、新たに地人相関的な立場が醸し出されるのである。日本にはもとより中国の影響はあるにせよ、一族の祖先神を祀るところの氏神信仰の習俗があったのであり、更に、印度には古代より死者の霊を供養するところの厚い思想があった。（儒教の礼や孝に関する思想も朝鮮半島を経て、または、直接日本に伝来した。）これら、日本古来の民間信仰の中の祖先観と、儒教の孝道思想、仏教の祖先崇拝思想とが互に結びつき、

当時の生業の主要を占めた農民生活と融合し、四季を通した年中行事の中にくみ入れられ仏事として全国的な広がりをみせたのである。わが国の如き変化の厳しい農耕生活の社会、とくに稲作農耕の社会では、死者と家族とのきずなが強く、他国では見られぬ信仰が出現したのである。元来、仏教の中枢をなすものは葬式ではなかったらしい。迷える者を救う事が仏教の主眼であり、その線に適った意味で葬送も行われたのかも知れない。かようなわけで仏教による葬送は釈尊にまで遡るのは当然なることである。仏教が葬儀を積極的に行うようになったのは鎌倉時代以降のことであり、その対象も原則として中流階級以上のものに限られていた。一般の間に普及伝播したのはせいぜい室町中期以降であり、更に繁栄したのは江戸時代に入ってからの事である。元来、葬送の意義は、死者の冥福を祈ると共に、死霊の祟りを祈ることにあったが、現代では死者に対する恐怖より死者に対する感謝、更には、周囲に対する意味をも含むに至ったのである。小乗仏教・大乗仏教の地域においても葬法は大部異なる。一般的にみて、小乗仏教の場合の方が旧来の慣習を保ち、その意味では行事綿密と言えよう。同じ大乗仏教でも、行事綿密と言う点では、中華民国や韓国などの方が旧来の風習を維持している。再三にわたり中華民国の葬祭場や個人の葬儀に立会った事もあるが、礼記的な葬送事物を現在でも多分に取り行われているし、韓国でも、各地にて葬式[2]が朱子の家礼を基準として行われている。しかし他面においては、儒教的形式の喪礼が行なわれていても、「死は使者が来て死霊を捕えて持ち去ってしまう。」などという、冥監本解的な、別な考え方も交叉している。台湾における道教的な考え方の交叉も同様である。同じ日本のおいても同様な立場が考えられる。日本の葬送の八―九〇％以上は仏教によるものである。もちろん、その中の多くの習俗は日本古来の民間信仰習俗と仏教との結合によるところのものであろうが、それでも宗派の相違によって多少の差異が認められるのである。各宗派によって教理思想の差異もあり得るも、とくに、他力・自力の相違が判然となる場合が多く考えられる。絶対他立主義の立場をとる浄土真宗の場合には、死者は阿弥陀[3]如来の本願によって浄土に往生し、そこで仏陀になると信ずるのであるから、僧侶によって引導は渡されないと言い、他宗の引導を渡すしきたりと実に対比的であり、後述する葬送習俗などの中にも、異なる部分が多々存在するのである。仏壇の東向きを好むものも浄土系信仰者の特色であり、極楽西方浄土を眺むれば、おのずと仏壇は東向きとなる次第である。元来、真宗は他宗に比して信仰・習俗面において純粋性が強い。本尊に対する信仰態度や供養習俗の中などに強く現われる。元来、真宗教団の生育歴とその伝播の史的条件によって、斯く、過ごさねばならなかったのかも知れ

ぬが、他宗派の伝播拡張と対比考察したならば、興味ある問題が得られるであろう。

三

葬式の期間は一体何時はじまって何時終るのであろうか。私はこれを便宜上、二つにわけて考えることにした。一つは、死の瞬間より、埋葬までの時間である。しかし最近の如く、当日、初七日まで行ってしまうところが多いので、初七日まで、と言うことなる。これを狭義的な場合と言おう。二には、死の直前より四十九日までの間である。これを広義的な場合と言う。一般の考え方では、前者が肯定的である。しかし、日本をはじめ、中国大陸近隣の地域の葬送習俗を眺めた場合、実質的に或る意味では臨終の頃を以って葬送の儀礼に入っているように思われるのである。

して、中陰の終了すると思われる四十九日（七七日）を以て、民間では霊が落着く、つまり、家を離れて成仏すると思われているのである。ここらが、人情的にも、葬送儀礼の終局と思われるのである。

臨終の折、あらかじめ医師は肉親の者たちを呼んで生命の幾何もなきことを告げるのが常である。血縁近き人たちは至急集められて臨終の枕元に立寄る。隣室では今後のスケジュールを立て実動出来得る態勢に入る。も早や葬送儀礼の態勢への第一歩である。中華民国においても搬鋪（ポテポオ）と言って、これに準じたことが行われた。病人の回復[4]が不可能と認められた場合には、病人を病室より別室に移した。二脚の長椅子を置きその上に板を置いてゴザと布団を布く。病人を臥せしめて息の終るのを待ったのである。台湾とても、数種以上の部族より分れ、必ずしもかかる風習のみとは限らぬが、その多くが恐怖的な観念をもって望んでいたことは確かなことである。不幸にして黄泉の客となるや一家集まりて号泣するのであった[5]。その折、金紙または石を以って死人の枕となし、或るときには息を引取ると共に当人が使用していたところの茶碗を打ち割るなどの方法がとられたのである。仏の足元に供えられる食事は脚尾飯と言い、茶碗山盛に飯をもり竹箸二本突立て其の中央に鴨卵の煮物一箇と共にそなえたのである。それゆえ、子供たちが食事の途中、茶碗に箸を突きたてることをこの上なく嫌ったのである。中国の広東でもその例が報告されている。死すれば速やかに合掌、または前面に手を組ませる風習は意外に多く、東南アジア地方の特色となっている。

同時に仏教の影響があると思われる地方の殆んどすべては北首面上が原則とされ、北首面西と、釈尊涅槃の故事に習ったものは一部に履行されているにすぎない。実際真の仏教信者としては北首面西を固持致したいところであろうが、現在の生活様式ではこの体位は不可能に近い現状にある。中国

大陸[6]は当然のこと、朝鮮の半島部、中華民国、東南アジアの仏教普及地域などの大部分に及ぶ地帯がこの形態をとっている。臨終方決（大正十七、七四六下）・長阿含遊行経（大正一、二一上）・仏般泥洹経（大正一、一六九上）等の諸仏典によるところの北首面西の故事、更には中国儒教の聖典礼記等の中にも触れられているところの北首の葬送習俗は、その根拠は別として、如何に古くより各地に伝播して用いられていたかを知る事が出来る。中華民国の高砂族の一部や泰国山岳部に居住する苗族などの如く、必ずしも仏教と縁の少ない人種の中には、北首をせず[7]、特定の霊地に頭部を向けるとき、川上に頭部を向けるとか、その地域の仕来りによるところのものが多い。また朝鮮の半島部においても五世紀頃より、頭の方向が従来の東向きであったものが中国式の北の方向にむけ、新羅は七世紀に入って石室と北枕を採択したといわれている。（韓東亀氏）

わが国においても沖縄より北海道に至るまで北首西面の思想が強いようであるが、実際的には死者を上向きにさせる習性が多いので北首にさせることのみが先行するようである。但、南西諸島から沖縄地方にかけて、死ぬと西枕にすると言う報告が二―三せられている。沖縄の竹富島では「死ぬと[8]西に枕をさせ手拭をかける。」と言い、その近郊[9]でも同様の報告がなされている。その近隣、トカラ・悪石島の葬送儀礼報告では安田宗生[10]氏が「死者を納屋に移し北枕にして寝かせる。」と述べておられるところから考えると、前者の西枕の報告は、北首西面の北首が抜けた説明なのか、それとも西首なのか、その辺がハッキリしない。私がかつて与論島に出かけた事がある。その当時、仏教信仰の姿は殆んど見られなかった。しかしその中にも、弥陀堂と言う地名のあったことをよく記憶している。江戸時代の後葉、薩摩藩主の島津氏が南西諸島一帯にキリシタン政策の一助として、それに対抗し得る浄土真宗を布教せしめたと聞いた事があるも、若しそれが事実とすれば、浄土往生を願っての西枕かも知れない。

死者に対する食物の供与、ならびに貨幣などの物品供与、号泣の風習、死者の身辺における呪術的習俗なども、その伝播発展の面から見逃すことは出来ない。前述した中華民国山間地域における葬送事の茶碗を割る習俗。死後仏飯に箸を突き立てたところの習俗も、日本で[11]数多く行われている。中華民国でのそれは、死亡時の処置として、息を引取ったその直後に茶碗を割ると言われているし、韓国や日本の場合にはその多くが、出棺時に多く行われているようである。しかし両者共に食物との縁を立ち切ることによって死霊との関係を打ち消そうとしたものであった。仏飯に箸を突立てる風習も日本の各地で行われた。死後の場合の仏飯として日本では多く枕元に置かれるのに対して、中華民国では脚尾飯の名称のも

とに足元に置かれる場合があった。かかる同意義的立場の中における多少のずれは、風土性・歴史性から生ずる国民感情の相違を現わしているのかも知れない。死者の茶碗を割る事、死者に一膳飯を与える事、この両者は、死者に食物を与える事の二つの意味を相異った習俗によって我々に知らしめているものである。現在まで継承せられてきた如何なる種類の葬法も、この内容を中に含み、更に葬具やその儀式方法など、すべてによって表現せられてきたのである。この二例だけではあまりにも引用するに、しのび難いと思う人があるかも知れぬが、葬送習俗などの構成内容は、かかる行事の積み重ねの連続なのである。

「死者の名を呼ぶ。」このような葬送習俗の例もまた非常に多い。どこで、いつ、どのように呼ぶかによって、その意義・内容も大いに異なるところであろう。人情的にも十分納得し得ることでもあるし、それが、更に儀礼的にあとあとまでも残るところもある。死者の生還を望むばかりでなく、肉体に霊魂が宿ると考えれば、当然死者の名前を呼ぶなりして、魂呼びの儀礼が行われる。「中国厦門[12]では気絶した人のことを「魂が肉体と結合していない。」と言うそうである。嬰児がケイレンした時、母親は何度も愛児の名前を呼んで意識の回復につとめるようである。その試みが駄目と知るや、彼女は急いで屋根上へ登り、嬰児の持物である衣服をとりつけた竹竿を振廻しながら、子供の名前を引続き呼び叫ぶ。時には更に魂の喚起を呼びおこす為に、銅鑼を高らかに叩く事もあると言われる。死者の場合も同様な習俗の行われる事が述べられている。韓国においても古来、葬送儀礼の一つとして招魂の習俗が残されていると言われている。

「死後直[13]ちに強直の来ないうちにその死相姿勢を保持し、七星板と称する木板の上に置き、屍体を北枕に臥さしめて顔面に白紙を覆い枕頭に貨幣を置き、……此の設備が終了すれば一人の男子（賤民中これを業とする者がある。）が出て、この前に立ち、死者の生前着用していた衣類を打ち振って、死者の住所や姓名を三呼し、衣類を屋上に投げる。」のがそれである。中華民国[14]においても高砂族の間に同様な習俗があり、臨終には親族一同がその人の名を呼んで、「あの世に入ってはいけない。」と叫ぶとの事である。ベトナムや泰国の山岳地に住む人たちの中にも仏教の影響を受けたところの住民がおり、呼吸が絶[15]えると招魂儀礼が行われると言う。肉親は今や肉体より離れようとする霊魂を呼び戻すべく、大声で死者の名前を呼び続けるのである。時には葬礼を司どる僧侶[16]が大声を張りあげて肉体より離れた霊魂を呼び戻そうとするが、霊魂の呼び寄せに数時間を要することがあると言われる。もともと招魂の儀礼は儒教を中心としたものと思われ、礼記中にもしばしば引用せられている。わが国にお[17]いてもこの習俗

の伝播は多く、つい最近まで行われていたと思われる。同時にまた、招魂の儀とは別に、遺体に或る一定期間（埋葬までの期間）霊魂が宿ると考えて、死体に手をかける前にかけ声をなす習俗もあった。埋葬[18]の場面で、墓掘の人夫の棟領が位牌を棺の蓋の上に置き、息子たちは指の間に線香を持つ……。続いて膝をついて叫ぶのである。「父よ（または母よ）起て」と。これらの言葉は霊を位牌に入らしめるために効果があるのだと言われているが、これも遺体に霊魂が宿っていると見られる行事の一例である。中華民国[19]においても、家柄の良い家庭では現在、中陰の間、入棺のまま室内に安置せられる場合があると言う。その間、朝と夕方の二回、家族の者が挨拶をする習慣がある。朝は歯磨や歯ブラシ、タオルを携えて「お父さん（お母さん）お早ようございます。」と、夕方は、「お父さん（お母さん）おやすみなさい」と声をかけるのである。沖縄でも葬[20]送行事の一過程として「アタカン」があると言われる、「そのゴザの切れ端と、患っていたときの汚れた着物を海辺に捨てに行く。これは長女か身内の女子の仕事であり、左の小脇に汚物を抱え、門の西側で西向きに立ち、「アハリドウ」と唱え、三度手を打ってから、前垣の西側を廻って捨てに行くと言う。多少儀式的ではあるが、前例に準じて生じたところの習俗である。同様な事はトカラ・悪石島にも存在する。「納[21]棺は奉公人が荒縄の帯とタスキをして行う。奉公人が男なら左から右へ、女なら右から左へタスキをかけて行なう。死者の枕は足で蹴ってのける。この時、本ネーシは火山下で身を清め、笹の葉を手にして「急げ、急げ」と唱えながら棺を撫でると言う。この時は神がかりの身体を激しくゆすった状態で行われるようだが、死者の魂を早く棺に納め悪霊より一時も早く防ぐためのものだと言われている。熊本県阿蘇地方[22]の枕おこし、同じく宮地町の仏おこし、つまり、湯棺のため死体を起しつかむ場合、子ならば親が、親ならば子がこの役に当り、必ず「起すばな―」と死者に一応のかけ声（礼）をしてから行うものとせられていた。葬送習俗の中には多分に呪術的要素が含まれているので、このカケ声もその一環をなしていると考えられるふしもある。死者に対し速やかに一つぱい飯を焚いて供えたり、ダンゴなどをつくって枕辺に置く場合がある。すでにこの風習は昔日、印度や中国においても存在したが、同時に、口中に穀物をはじめとして、貴金属などを入れて、霊を弔い、または霊を呪術として守護した場合もあった。大清通礼巻五十二には、それぞれの官位によって口中に真珠や金屑・銀屑を詰むる規定のあった事を教えているし、熹の家礼においては、口中に貨幣を入れた事を規定している。更に礼記巻五十六には、天子の口中に、諸侯に、大夫に、一般士人に、それぞれ、九・七・五・三個の貝を入れべしと、死者の口中に貝を含ませた事を記述

している。ラオス[23]にても「最後の呼吸が絶えると直ちに遺族は香水で遺体を清め、新調の衣服を着せ、口中に貨幣を含ませる。」と言い、カンボヂヤ[24]でも「絶命後、遺体はその子や孫の手によって清められ、口中に若干量の水銀を含ませ、次いで更に口中に銀板を入れ、唇、眼、鼻口、耳には各々四角形の黄紙を載せる。」と、せられている。泰国山岳部の住民中にも「家長が死ぬと、長男は死者の瞼を閉ぢ、口中にきんま、数粒の米、一厘銭七枚（女は九枚）を含ませる。」と、この習俗は割に広範囲に見られるところであるが、わが国でもその片鱗が伺われる。東南アジア、とくに大陸部で行われるかかる風習は、その原流が中国大陸に求められるが、しかし、その意義目的は二つに分類されている。一つは呪術的な効果より生じたものと、他は、死者への守護と報恩より生じたものである。わが国の場合は穀物を口中に入れる場合が多く見られ、後者の面を強く浮き出している。穀物は昔日より大切な生命の根源であり、葬時のみでなく、婚時、産時の場合にも重要な役割を果してきた。豆や米[25]をまいて悪魔祓いをしたり、出産の穢に対して散米したりするのもそのためであった。更に稲籾のあの底力ある発芽力は、なによりも増して葬時における生還としての魅力を買ったのである。口中に穀物、とくにわが国の場合、白米を三粒か五粒位入れる例をよく聞く、元来は、稲籾を入れるのが正式なのかも知れぬが、その風土性があるので断言は出来ない。長野や山梨などの山間部落で、死者の口中に白米を入れるという習俗がある。むかし麦食のため白米を食べる事の出来なかった故人に、「せめてこの世の別れの時だけでも食べさせてやろう。とて、白米を与えてやるのだ。」と聞いた事がある。中国では死者の口中に水銀を入れた時代もあったと聞くし、また、真珠や金玉などを入れた事もあると言われる。もちろん、穀物を入れた地方も数多くあったことであろう。身分の上下、または地域性によってその方法と内容とは異なるかも知れぬが、人間感情の同一性と言うことが深く考えさせられるところである。

自己の感情を抑圧するか、それとも自由に発散するか。その人その人の個人性にもよるであろうし、その国土の歴史や風土性にも大きくかかわってくる問題であろう。従来の生活性から考えて中国などの場合はおおらかな喜怒哀楽を自然に委せた生き方であったと思う。喜ぶべき時は共に大いに楽しみ、悲しい時は大いに泣き合う。これが大陸での葬送習俗の根幹をつくったものと思われる。日本の場合は多少これと異なり、神経質症状を有し抑圧性的なように考えられる。これも、日本のもつ島嶼とその位置的地位、変化多き地形と気候現象、以上の諸要素から生じたところの国民的感情がそうさせたのである。先に述べた如く、葬送習俗として行われている大部分の事物は、すでに中国にあったとして見ても大きな

間違いではない。その内容が、直接・間接のうちにわが国に訪ずれたのであるが、到着以来、その多くがわが国のものと同化して、あるものは形をかえ、あるものは消滅していったのである。年忌供養の如く、わが国に伝来することによって、更に栄え、回数の増化したものもあるけれども、これらは日本仏教僧侶生活の変遷より生じたところの特産であり、生まれべき過程に当然生じたと言うべきものである。

中国での葬式と言えば、すぐ挙げられるものに泣人と楽隊がある。とくに、泣人は有名である。泣人は中国だけのものではなく、現在でも世界各地の未開地にも未だ残っていると言われる。第二次世界大戦に従軍した将兵が、中国大陸をはじめとして、華僑の発展している東南アジアの地域で見聞したので、その観を一層深めているのである。日本でもかつて、[26] 泣人の習俗があったらしく、民間伝承の中に印されている。諸国風俗問状答、越後長岡領の項には、新潟県魚沼郡の山里にて葬送の折、悲泣をたすけるために、よく声をあげて泣く者をやとって泣かしめ、泣手の上手下手の如何によって一升泣・二升泣といって報酬が異なったとか、淡路の沼島浦にも泣婆々の風習が残っていたと言われている。その他、北は東北から南は沖縄に至るまでこの風習は残っていたのである。江戸時代宝暦年間の頃書かれたと思われる、三田村鳶魚の著、下手談義には、当時の葬儀屋が、泣人をパート式に用意していた事が書かれており、誠に興味を引くところである。儀礼化された泣人の歴史は中国においては至って古い。おそらく仏教以前の葬送儀礼に一入厳然さを加えたのは何と言っても号哭の儀であったのであろう。礼記なども、このことを挙げ、[27] また、中国の葬送儀礼においても、死者の処置に関連のあるすべての重要な儀式面には号泣の儀が加味されている。デ・ホロート氏は中国における号泣にふれて斯く記している。

「中国における死者のための号泣は主として儀礼上のものであり、愛情と悲哀との真の感情にはたいして関係はない。実際また、涙の流されることは稀であり、故人の死んだのが数年前で、子孫が殆んど故人を憶えていなくとも、泣き声はやはり熱心に大声にはり上げられる。故に、通行人のいない原野に出ると泣声が止み、葬列が居住地域に達するか、目立つ人に会うか、名家の前に近づくとかすると、早速に泣声の始まるのも全く当然であろう。死者の家族が急に泣くのを止めて、見かけることの稀な外人に、好奇心のこもった微笑の眼を向け、不思議な人物を通り過ぎるや否や、また泣き出すのを、われわれは葬列を眺めながら認めて驚いた事もしばしばあった。」氏は、「同様な事は、かつてローマやオランダにもあった。」と指摘されているが、日本の場合と多少異なる事は確かである。但、この記事が中国の葬送に参加する参列者達の全様とは考えられず、あくまでも、歴史的立場と泣人と

しての立場を勘案して考うべきである。現在の新大勢下の中国の葬送事情はよくわからぬが、中国南部の影響を強く受けているところの中華民国やホンコンの田舎部の葬送場面を観察するに、日本の場合に比して号泣の仕来りが強そうである。今でも初七日から四十九日までの累七の法要において、泣人を思わせる仕草が残っている。中華民国の僧侶や道士たちは、法要における布教の折にふれて、「周囲の人たちが泣くと、死者が心残りして、あの世で成仏が出来ない。なるべく我慢するように。」と説いているようである。昔は泣く事によって葬送の効果を挙げ、死者を成仏させるものと思われたのに、周囲の情勢によりその解釈もまちまちである。死者を扱う葬送儀礼の中に呪術的要素が含まれている事は古今東西同様な事である。とくに長い歴史をもち、哲理思想の深い中国大陸において、この習俗の栄えることは当然な事であった。わが国も古くからの中国との国交によりそれに関連した習俗が数多く伝来したのである。もちろん、印度より中国を経て東南アジアの文化を含有したものも数多くあった事であろう。また、東南アジアの葬送習俗を具に観察すると、中国より西南に伝播したと思われる習俗が沢山見受けられるのである。その中には、中国大陸の南部地域を母体として進出した。華僑文化を忘れることが出来ぬのである。

四

葬送習俗に関係ある重要な事項として、死者の身辺における呪術的習俗がある。もちろんこれは、葬列から埋葬地としての墓地にまで関連づけて考えられる事である。

死を感知する島類の説話から、湯棺、出棺、刃物、箒、禁獣、葬送行列と葬具、浄めの習俗など、その範囲は至って広い。このうち主要なものを掲げて比較検討することにしよう。

死の兆候説話には色々あるが、日本で一般化しているものは何と言っても烏（カラス）に対する問題であろう。とくに、あわれ烏[28]などと呼ばれ、その立場を信ずる者は意外に多いと言われている。普通の烏の鳴声は別に問題とはならぬが、特定の場合にのみ問題となる。ここに葬送との関連性が生じてくるのである。この場合の烏の出現は忌み嫌われると言うよりもむしろ、因縁的なものとして、あきらめ肯定している場合が多いようである。同様例のある事を中華民国の台中の田舎部でも聞いたので、日本だけのものではないらしい。日本古来においてはホトトギスなどもしばしば引合いに出されたが、必ずしも烏（カラス）だけとは限らない。[29]東南アジアのカンボヂア人の間でも彼等は鳥（トリ）による前兆を信じている。「ある鳥、ある獣の出現は悪兆の報せである。例えば梟が夜中に病家の上を飛ぶ時は、死の前兆であり、山中にいる Oula（鳥の名）の飛ぶ方

向や鳴声の響く一帯は病人が生ずるものと考えている。狼や犬の遠声や蛇の出現も何れも不吉の前兆である。」としている。但しこれら不吉と考えられている鳥獣でも、或る立場においては歓迎せられる場合もあり得るのである。岡山地方の一例[30]であるが、「墓前に供えられたものが烏（カラス）などによって食われないと、ミズノミがあがらないと言って遺族の者たちは心配する。供養をしてもホトケの気に入られないとしておそれ慎しむのである。ミズノミのあがるあがらぬによって、亡くなったホトケの意向をうかがい知り得るとしたのである。なんでもよいから、仏前に供養したものが、早くなくなると縁起がよい。という考え方は予想以上に広く分布している。墓前に[31]限らず神前でも供えた供物のなくなると言うことは好ましいことであったらしい。どうぞ食べてくださいと供えたものだから、なくなれば先祖が召し上って下さったのだと考えられたのである。従って供物がいつまでも残っていることを忌む気持がある。現世に[32]執着のある霊は、なにかしらの祟りをなすものとして嫌われる場合が多かった。幸福なものは早く来世に行き、然らざる者は不幸であった。その判断は、墓前に供えられた団子・仏飯などを烏（カラス）が早くついばむのを以って、死霊が安らかに成仏するものと考えられ、然らざるものを、成仏出来ぬ不幸な霊と考えられたのである。

実際に烏が食おうが狐が食おうが、なくなりさえすればよかったのである。供物がなくなれば先祖様が受けとったものとして目的は達したのである。それと本質は異なるが、参考とすべき類似習俗がかつての中国青海部に葬送習俗としてみられた。宗教的にはラマ教地域に属するも「死人を着衣[33]のまま縄で縛って坐らせ、その前に供物も置かず、焼香もせず、側に喪主が坐して来客の応対をする。葬送の時は、最も高い山の頂上で成可く岩の上に死者を置き、鳥獣に食わせ、骨になれば生前善行した人で成仏すると信ずる。悪疫のために肉が腐爛し、鳥獣も食わぬ屍体に対しては家人は大いに悲しみ且つ怒り、大斧で之を寸断して鳥獣に与える。……または父の屍を野に棄て、三日後にその子が検査し、若しその屍が狼や野犬などに食われていなければ、ラマ僧に父の生前の罪を解いて貰わねばならぬと言う。平生罪をつくった者には、死後、狼や野犬でもその肉を食わないから、必ず仏法の加護を必要として一昼夜ラマ僧に読経を願い、その罪悪を亡し、再びその屍を野獣に食わすと言う。若しなお三日を経てその肉が食われなければ、隣人が集まってその子を責めたてたとの事である。そもそもかかる原因は、その父の生前の罪悪が甚しかったので、その子は父に代って罪滅（つみほろぼ）しのために罰を受けるのであると言われ、群衆は子を笞打つのだと伝えられている。前者は死の兆候と鳥獣に関する習俗であり、後者は死体処理と鳥獣に関する習俗の、互に関連せる問題であった。

二者の立場は異なるも、その流れている死者に対する考え方には意を注ぐべきであると思う。葬送習俗の中に、常に二つまたはそれ以上の異なれる考え方の含まれている事は何度も述べた。しかし、この場にのぞんで一番大切な事は、無理な論理で費したところの考え方は誠に危険だと言うことである。これにのぞんだ人たちのしぜんの心を汲み取りながら判断なすべきである。今まで、日本独特の習俗だと思われていたのに、中国やその近隣諸国の葬送習俗を探究してみると、色々と不可解の問題が出て来る。また、その葬送習俗のもつ意義や内容の説明についても、一方的に解釈せられていると思われるものも大分出て来た。もちろん、東洋的に見た場合と西洋的に見た場合、キリスト教や回教的に見た場合と仏教的に見た場合、中国的に見た場合と日本的に見た場合、それぞれの立場の相違があり得る。人の考え方には十人十色、百人百色であるのであるから、そのような事は当然であろうが、広範囲に資料を集め、結集を要する時代の来たのは確かな事である。

死霊に対する呪術として禁獣・箒・刃物などに関する伝承がある。もちろん、ここに挙げたものがその全てではないが、目にふれたものの主なるものとして掲げたまでである。

葬送に関連性のある動物として、その第一位を占めるものは猫に関する物語である。

猫については印度[34]において中阿含経や増一阿含経中に、中国[35]においても礼記や説苑中に、日本においては日本霊異記[36]中に、「非理に他の物を奪い、悪行を為し、悪報を受け奇事を示す縁」と言う見出しのもとに紹介されている。その他、源氏物語や更級日記、今昔物語など多くの書物にその名称が出てくるが、室町時代を降るに従って殺生戒を破る猫の評判は一段と悪くなる。明月記[37]や徒然草[38]には猫股（ネコマタ）のもとに、猫はその魔性妖奇譚ぶりを発揮している。切紙などには葬送と関連した猫魔の封術に心を致しているものが各地に存在していると言われている。かようなわけで古来より葬送と猫との習俗説話は一般民衆の間に深く滲透しているのである。日本の各地に伝わる死霊と猫との関連伝説の本体は、その起原を徒然草の内容に求められ、未梢的な部分が地方的伝承として趣を異にしているのである。「死者の上を猫がまたぐと死者が起きて悪事をはたらく。」と言う伝承がそれである。沖縄の竹富島では「死人[39]の上には刃物を置く、部屋に猫の入るのを嫌う。」沖縄本島では、「当日[40]葬式のできない場合に限って通夜が行われ、そのときには、猫を避けるためと称して、蚊帳が吊られる。」と、長野の北部[41]の地方では、「ツヤは死んだ晩からする。三晩が普通である。その間、線香、ローソクをたやさない。死人には猫があがらないように鎌をおき、神棚の大神宮、恵比寿、大黒に内山紙の神かくしを貼りつける。」

と言う。中華民国[42]では「屍体は衣を巻きその上に被を以って掩う。（中流以下は被なき者が多い。）然して家人屍体の辺りに集まり胸を打ち跳躍して号哭する。この時屍体の傍らに猫を入れる時は、死者猫の生気に感じ死者再生して怪鬼となる。」更に驚猫（ニキアヴ）とて、「屍[43]体は体温未だ全く去らざるも四肢、身体を直正に安置する。この場合に最も恐るるのは猫の屍体に接することである。猫は元来虎性で、若し屍体を跳る越える時は屍体は立ち上って人またはその他の物を抱くと言う。それで屍体の傍の土間で喪主等は納棺まで御通夜をするのである。これを守鋪と呼び、若し猫が屍体を跳ね越え屍体が立ち上ったときは天秤棒、または杖、その他如何なるものでも一度これに抱かせるときは、元の通りに倒れる。」と、考えられている。同様な[44]習俗は今尚朝鮮半島などにおいても行われている。――猫[45]はその外観のみならず、特徴・態度・習性までも虎に類似していることを中国人はよく知っている。それ故にかかる小型の虎「猫を指す。」も、環魂も（虎はその尾に不思議な毛を持っていて、動けず無感覚になった人の体に霊魂を戻す力がこの毛にあると言われた。）を持っていて、水床上に跳び上って死体を危険なる悪鬼に変えることも、容易に起り得るのではないか――と考えられているのである。ところで時代が異なると、猫に変って他の動物が代行する場合もある。同じく中国ではあるが、南部広東省地方の場合である。「人の死[46]ぬときには家人は死者の左右で号泣する。死者の側には一皿の豆油灯を燃やし、納棺前には昼夜共に点灯する。灯と死人の霊魂とは一脈通ずるとしているからである。死体は時々看守する。それは、鶏や犬などに安眠を乱させぬ為であり、若しも鶏や犬などが屍体の上を跳ね越えるようなことがあれば、その霊魂は地獄に落ち、永遠に苦痛を受けるからである。」日本でも猫に代って犬が出現することもある。中華民国でも猫に続いて狗（いぬ）を忌む習俗が残っているといわれる。各国とも、猫を葬送時に死霊より避ける習俗は同義として認められるものの、その解決方法においては以上の如き相違が見られたのである。ここに用いられたところの刃物や棒の作用が、ところによっては箒や杖の登場となり、また、刃物もところによっては、カミソリ、刀、鎌、ナタ、などと、風土色を持っていることに興味があった。現在行われている葬送習俗の中で、割に残されている事項と言えば、死者の枕元に置かれている刃物と、足元に置かれている箒との二習俗であろう。この問題については殆んど全国的に伝播されたところの風習であるだけに、その意義を解いた文献も多い。

「四国[47]の一地方では、納棺の前に屍体の上に箒をおくとか、刃物をおくところがある。箒はまぎれもなく霊の依代と考えられる……しかしながら、古い姿をかきわけてゆくのはすこぶる困難であって、死体のそばに置く刃物の類が、もともと

は鎮魂の意味をもっていたのと同じように、一文銭にかぎらず何かの金属を、魔よけ（古くは鎮魂）のために入れる必要があったのではないかと推測するにとどめておく。」

「鳥取県[48]の一地方では、埋めたところに「クヨシ」といって藁を丸く束ねて火をつけて一週間ごとに丸く置いたり、埋めた場所に鎌を吊ったり、箒をたてたり、或いはすげ笠を上に置くなどがある。」

「埼玉県[49]東秩父地方では、臨終に際して肉親や近隣の人達が立会って末期の水をとる。死の直後北枕にし、その上に男は古い刀や鎌などのきれもの、女は織機のオサなどを乗せる。大内沢では縄を下げて鍋で一合程の飯を炊き、シャクシで盛ってはしを一本立て枕元に置く。」

「沖縄では葬送[50]の際、各家では門口に、竹・ホーキを横たえる。……」「トカラ・悪石島[51]では死人が出るとまづ奉公人と呼ばれる人が二人出る。遺体を扱ったり、葬儀の中心的役割を果す。奉公人がまず死者の足を曲げ、足が曲らぬ時はホーキで足を打つ真似をすると、すぐに曲るようになると言う。」

「アイヌは[52]……頭を東に死体を静かに安置し、肉親が一にぎりずつ土をバラバラとかけ、それから副葬品を入れる。まぜ飯を入れた器（うつわ）以外は鎌できづつけたり、鎌の背で一回たたいてこわす。これもおそらく死霊のたたりや、よみがえりを防ぐためである。そのあとでどんどん土をかける。」

「中国[53]の北京地方の習俗では、家族が家に帰ると陶器の鉢に包丁を二、三度こすり、それから手鏡をとってながめ、氷砂糖をつまんで食べる。というのは包丁をこすって悪鬼をおどし、手鏡で悪鬼のいなくなったのを確かめ、氷砂糖を食べて家族の一人をうしなった苦しみを去るという意味である。」

葬送儀礼の際、箒や刃物、とくに刃物を枕元に置く風習は至って多い。中国、中華民国、朝鮮などをはじめ、東南諸国の間でも時折聞かれる。もっとも、東南アジアには華僑の居住する故、その伝播を見たのであろう。

元来、猫の魔性を追払う立場として、または、葬送における悪鬼の魔性を避けるために用いられたのが箒であったものと思われるのである。しかし他面、刀剣の持つ魔力はその中に威力をも加味して、別の意味において怨敵退散の役割を果すと考えられたのである。泰国やラオスなどの山岳部住民の中には、死霊を追払う行事にしばしば槍や剣などを用いられたが、いずれもその部族に適した刃物を用うると言う点では同様な事であった。但、仏教を通じて考えられることは、僧侶と剃髪の問題である。葬送行事を行うとき、一番大切な事は、仏門に入りホトケになると言うことであった。この儀式が剃髪の儀であり、古来においてはカミソリを用いて実際に行われていたのである。しかるに時代が降り、その風簡略化されるやカミソリを当てる程度となり、ついにはカミソリを

枕元に置くだけになってしまったのである。元来、葬送における刃物とは、カミソリを中心としたものであったが、武家にては刀剣、農家にては鎌、山村地域においては鎌や鉈（ナタ）など、もともとの主旨が転化してしまったのである。

参考・引用文献

(1) 赤田光男氏　日本民俗学　八一号　昭和四十七年五月　十六頁
(2) 張籌根氏　韓国の民間信仰　昭和四十八年九月　金花舎発行　三六〇頁
(3) 花山勝友氏　葬式法要日本教　昭和五十年九月　婦人生活社発行　一四三頁
(4) イ片岡巌氏　台湾風俗史　大正十三年九月　台湾日日新報社発行　三十四頁
　ロ田上忠之氏　蕃人の奇習と伝説　昭和十年七月　台蕃研究所発行　七十三頁
(5) 鈴木清一郎氏　冠婚葬祭と年中行事　昭和九年十二月　台湾日日新報社発行　二百十三頁
(6) 今村鞆氏　朝鮮風俗集　大正八年十二月　ウツボヤ書店発行　六十二頁
(7) 田上忠之氏　蕃人の奇習と伝説　七十四頁
(8) 内盛唯夫氏　日本民俗学　五号　昭和三十四年二月　二十二頁
(9) 平敷令治氏　日本民俗学　七四号　昭和四十六年三月　三十一頁
(10) 安田宗生氏　日本民俗学　八二号　昭和四十七年七月　五十一頁
(11) イ井之口章次氏　日本の葬式　一九六五年六月　早川書房発行　百二十九頁
　ロ松涛弘道氏　仏教のわかる本　昭和五十年三月　広済堂出版発行　二十三頁
　ハ井出李和田氏　支那の奇習と異聞　昭和十年五月　平野書房発行　七十八頁
　ニ韓東亀氏　韓国の冠婚葬祭　昭和四十八年三月　図書刊行会発行　三百六頁
(12) 中国宗教制度　第一巻　昭和二十一年八月　大雅堂発行　二百十八頁
(13) イ今村鞆氏　朝鮮風俗集　大正八年十二月　ウツボヤ書店発行　六十二頁
　ロ韓東亀氏　韓国の冠婚葬祭　昭和四十八年三月　図書刊行会発行　二百八十四頁
(14) 古野清人氏　高砂族の祭儀生活　昭和二十年三月　日本出版発行　二十二頁
(15) 中島宗一氏　印度支那民族誌　昭和十八年三月　満鉄調査局発行　四百十一頁
(16) 中島宗一氏　印度支那民族誌　四百二十六頁
(17) イ井口章次氏　仏教以前　昭和二十九年十一月　古今書院発行　四十二頁
　ロ佐藤米司氏　日本民俗学　八十一号　四十四頁
(18) 中国宗教制度　第一巻　百九十頁

(19) 呉本信一氏　大正大学学講師より紹介指示
(20) 田中緑氏　日本民俗学　一〇二号　四十四頁
(21) 安田宗生氏　日本民俗学　八十二号　五十三頁
(22) 井之口章次氏　日本の葬式　一九六五年六月　早川書房発行　八十四頁
(23) 中島宗一氏　印度支那民族誌　三百六十九頁
(24) 中島宗一氏　印度支那民族誌　三百二十六頁
(25) 西岡弘氏　中国古代の葬礼と文学　昭和四十五年七月　百六十六頁
(26) 柳田国男編　民俗学辞典　東京堂発行　四百二十一頁
(27) 中国宗教制度　第一巻　百七十四頁
(28) 安田宗生氏　日本民俗学　八十二号　五十一号
(29) 中島宗一氏　印度支那民族誌　三百五十三頁
(30) 佐藤米司氏　日本民俗学　八十一号　四十九頁
(31) 井之口章次氏　日本民俗学　五十八号　二十七頁
(32) 大藤時彦氏　民間伝承　第十巻　第三号　四頁
(33) 井出季和太氏　支那の奇習と異聞　三百二十八頁
(34) 大正大蔵経第一巻「阿含部上」弊魔試目連経中、及、同巻、中阿含経第三、降魔経中。
(35) 礼記、効特性篇
(36) 新校群書類従　雑部一巻　第四百十七項　日本霊異記
(37) 図書刊行会発行「明月記」天福元年八月二日の項
(38) 徒然草　第八十九段　おくやまにねこまというものの項
(39) 内盛唯夫氏　日本民俗学　五号　二十二頁
(40) 平敷令治氏　日本民俗学　七四号　三十一頁
(41) 山本明氏　日本民俗学　八七号　四十四号
(42) 片岡巌氏　台湾風俗誌　三十四頁
(43) 鈴木清一郎氏　冠婚葬祭と年中行事　二百十七頁
(44) 今村鞆氏　朝鮮風俗集　六十三頁
(45) 中国宗教制度　第一巻　四十二頁
(46) 井出季和太氏　支那の奇習と異聞　六十九頁
(47) 武田明氏　日本民俗学　九七号　五頁、八十九頁
(48) 田中新次郎氏　日本民俗学　二二号　三十八頁
(49) 埼玉県東秩父槻川の通過儀礼習俗
(50) 平敷令治氏　日本民俗学　七四号　三十一頁
(51) 安田宗生氏　日本民俗学　八二号　五十一頁
(52) 芳賀登氏　葬儀の歴史　昭和四十五年七月　雄山閣発行　百六十九頁
(53) 内田道夫氏　北京風俗図譜　昭和三十九年七月　平凡社発行　九十九頁